

11. 中世イングランドと 英語の復権

要点

- 英国史・英語史は（ ）
との交渉のなかで形成されてきた
- 中世イングランドの歴史は
（ ）支配からの独立の歴史
- 中英語の歴史は（ ）支配か
らの独立の歴史

5 回の征服 #37

1. (): BC 6000 –
2. (): BC 55, 54; AD 43
3. (): 449
4. (): mid-8th century – 11th century
5. (): 1066 = () の
征服

なぜこれほど征服されたのか？

- 英国は地勢的に大陸へ開かれている
- 常に大陸からの脅威に晒されている

#159

結果として

- 英国は歴史的に（ ）国家
- 英語は歴史的に（ ）言語

イングランド王朝の変遷

1. ケルト人の族長

(): ~43

2. ローマ人の支配者

(): ~410

3. Anglo-Saxon 王朝

(): ~1066

4. Viking 王朝

(): 1016~42

5. Norman 王朝

(): 1066~

6. Plantagenet 王朝

(): 1154~

7. Tudor 王朝

(): 1485~

8. Stuart 王朝

(): 1603～

9. Hanover 王朝

(): 1714～

10. Saxe-Coburg-Gotha or Windsor 王朝

(): 1901～

英国はアングロ・サクソン系か

英国とそこから派生した国々はアングロ・サクソン系と呼ばれるが，その象徴としての英国王室が純粋な Anglo-Saxon だったのは，()～() 年（途中 Viking 王朝の中断あり）のみ．それ以前と以降はすべて()系である．

英国・英語の本質

「英国＝アングロ・サクソン」という一面的な見方は誤解に基づく神話．以上の英国の歴史を考えれば，英語を含む英国文化の本質はその（ ）性・（ ）性にあることは明らか．

中世イングランドの社会的背景

- () による支配の時代
- () 年, ノルマン人による征服
#88 『英語史』 p. 55
- (), イングランド王として
即位
- アングロ・サクソン王朝が途絶える

中英語の社会的背景

- () による支配の時代
- 王侯貴族の母語は ()
- 一般市民の母語は ()
- 中産階級は () も
- 大学人・教会人は英・仏・ラテンの
() も #117

フランスにこだわる王家

- イングランド王家，フランスに広大な領土を
- () 王朝 (1154–1485) の開祖
Henry I はフランス王よりも広い領土を獲得
- 狙うはフランス王位
- しかし (), 痛恨のノルマン
ディ喪失 (1204)
- その後も奪回の機会を狙うがうまくいかず，

- Edward III がフランスと () 戦争 (1337–1453) を始めた.
- () の活躍で、イングランド敗北.
- 結果、フランス王位を諦め、ブリテン島に向き直った.
- しかし、フランスへの未練は実に () 世紀後半まで続く (cf. 王家の紋章 #433)

フランス語ばなれの兆候

- John のノルマンディ喪失 (() 年) により国内に目が行き始める
- () 戦争によりフランス語が敵の言語に
- 敗北により，イングランド自身へ関心に移る
- イングランドの言語である英語に復活のチャンスが

英語，地位を回復（『英語史』 p. 70）

- 英語を母語とする（ ）階級の台頭
#131
- 1258 年，（ ）の乱
- 1349 年，（ ）の流行 #119,
#138, #139
- 1362 年，（ ）の開会宣言が英語で
- 1390 年代，（ ），英語

で *The Canterbury Tales* を著す

- 1399 年，英語を母語とする初の王
() が即位 (←Chaucer が晩
年に仕えた王)

まとめ

- 英国史・英語史は（ ）
との交渉のなかで形成されてきた
- 中世イングランドの歴史は
（ ）支配からの独立の歴史
- 中英語の歴史は（ ）支配か
らの独立の歴史